



おおば あきえ
大場 秋江 さん(花苗生産農家)

1951 年生まれ 塩川町出身

勤め先を早期退職し、専業農家に転身する。

現在は、60 種類以上の花苗を市内外に出荷するとともに、農泊農家として様々な体験を実施している。

グリーン・ツーリズム実践団体「喜多方めんこいくらぶ」会長

現在の活動について

多い時で 70 種類を作ったこともありましたが、現在は約 60 種類の花苗を育て、新潟や福島の市場に出荷しています。パートの方 1 名を雇い、ハウス 7 棟で春・夏・秋の 3 回に分けて育てています。また、花の特徴や育て方を伝えようとこの仕事を始めたので、対面販売を大切にしたいとの思いから様々なイベントに参加し、花を販売しています。育てた花はわが子のようなものなので、その後が気になって様子を見に行くこともあります。

平成 22 年からは農泊も始め、県内外から時には海外からお客様を受け入れ、花の仕事だけではなく、綿づくりや料理など様々な体験をしてもらっています。お客様にいい思い出を作っていただけよう心がけていますが、何より自分が楽しませてもらっています。また、訪れた方に花づくりも農業だと知っていただき、興味を持っていただければと思っています。

専業農家への転身

もともと実家は農家でしたが田畑が少なく、また、私がちょうど高校生の頃に国の減反政策が始まったことから、親は農業だけで食べていくことは難しいと考え、私に勤め人となること勧めました。農業の専門学校で生活改良普及員※1という資格を取得した後、30 年間会社勤めをしていました。

仕事で農業に携わっていましたが、塩川のファーマーズマーケット※2の立ち上げにかかわったときに、農家のお母さん方から農業についていろいろと教えてもらい、自分も農業をやりたいと思うようになりました。そして、52 歳のときに思い切って退職し、農業を始めました。

花が大好きだったので、花を作ろうと考え、山形県飯豊町の花苗を出荷する農場で研修させてもらいました。他の研修生は 30 代までの若い人しかいませんでしたが、その社長がやる気があるなら来なさいと言ってくれ、そこで花づくりのノウハウを教わり、その後自宅にハウスを建てました。

社長には研修終了後もオープン時期をアドバイスしてくれたり、農場の苗を分けてもらったりとお世話になりました。4 月のオープンだったので、春の花は苗を分けていただき、夏の花を 10 種類ほど育てることから始めました。

この仕事を始めて、今年でちょうど 10 年目になります。



花苗を育てるハウス内の様子

ハウス内には現在色とりどりの春の花が並ぶ。

※1生活改良普及員

農山漁家において、生活の向上に役立つ知識や技術を指導する者。国家資格の一つ。
2004年の法改正により、専門技術員と統一され普及指導員に改められた。

※2ファーマーズマーケット

地域の生産農家が自分の作った農産物を持ち寄り、消費者に直接販売するタイプの市場

始めてからの苦労と周囲の支え

当初は直売を優先しようと思っていましたが、それは甘い考えで、直売ではなかなか売れませんでした。そこで秋の花からは市場に出荷するようになり、会津若松や福島、時には仙台の市場に出すこともありました。

また、始めてから3年目くらいが経営的に一番つらく、これから本当はどうしようか落ち込んだ時期もありました。その時に同業者の方がアドバイスをくれたり、友人が気分転換に誘ってくれたり、いつも周囲の人が助け、応援してくれました。色々な人に手を引いてもらい、少しずつ階段を登るようにしてここまで来ることができたと感じます。

その方たちを裏切ることはいけないという思いがほどよいプレッシャーとなって、今でも頑張っているのではないかと思います。

思い出に残る体験を

農業を始めたら、いつか農泊もやろうとは思っていました。ある冬の時期に群馬の研修生を受け入れた際、車での子供が心配だったので、研修中は私の家に泊まってもらうことにし、家を片付けて3カ月間一緒に生活しました。この経験から、思い切って農泊を始めることにし、平成22年に農泊農家として登録しました。

農泊を始めるまでは、花のことで頭がいっぱいでしたが、農泊を始めてからはお客様のために何をしようかと、また別のことを考えるようになりました。農業と農泊では、頭の中で考える場所が違うのかなと感じます。



出荷を待つ花たち

農泊では、ポットへの花の植え替えや出荷する花の選定・調整などハウス内での作業はほとんど体験してもらいます。以前泊まりに来た子どもに「花ってこういう風にできるんだって思ったら、家でお母さんが買ってくる花も大事にしなきゃと思った。」と言われた時は、とても嬉しかったです。他の方も感想をノートに書いてくれますが、それも嬉しいです、励みになります。

海外の方が来た際は、英単語やジェスチャーを使いながら、交流し、農作業の他に、着物の着付けやお茶の体験も行いました。

また、料理を一緒に作ることもあります。学生さんの中には茶碗洗いも包丁を握るのも初めてという方がいて、初日はおっかなびっくり包丁を使っていましたが、3日目には自ら進んで料理をするようになりました。そこで料理の楽しさを体験してもらえたのではないかと思います。男性でも女性でも何でもできることに越したことはありません。農泊を通していろいろなことを体験してもらいたいですし、将来ふとした時にでも、「これ、福島のおばさんが言ってたな。」とここでのことを思い出してくれたら嬉しいですね。

食の大切さ

食べることは私たちの生活の基礎です。「医食同源」という言葉もあるように、食べることは大切なことです。野菜は旬のものが、一番栄養価が高く体にも良いですから、春はアスパラガス、夏はナスやキュウリ、秋にはかぼちゃ、冬は白菜や大根などそれぞれの季節の旬のものを味わってほしいです。また、郷土料理の大切さも伝えたいと思っています。会津は海がないので、棒タラやニシンなどの乾物が発達しました。ニシンの山椒付けなどは、田植えの休憩時間に栄養源として食べられていたものです。郷土料理の成り立ちはかつての私たちの生活に深く結び付いており、大切な文化の一つです。

そういう話を農泊で来た方にお話ししながら、食の大切さをお伝えできればなと思います。

花の本音を伝えたい

私も昔からよく花を植えていましたが、ある時春先を買ってきた花が根付かないということがありました。その花は南の方で栽培された花だったので、北の寒さに弱かったのだと思います。そこで今は比較的低温で育てて、春先に霜にあたっても大丈夫な苗を育てており、地元で育てた花の強みを活かしたいと考えています。

また、パンジーやビオラは秋に植えた方が良い株になって長持ちします。寒い中、植えたままにしておくのはかわいそうだと思うかもしれませんが、雪の下でも大丈夫ですし、その方が丈夫になるので良いのです。

実は宿根草(一旦枯れても時期がくると芽を出す植物)なのに、寒さなどに弱いため一年草とされている花がたくさんあります。例えばペゴニアやサイネリアがそうですが、暖かい部屋や日に当たるところ置けば冬も越せて花も大きくできます。

こういった花の特性や植える時期を、お客様が花を買いに来た際にお話しています。

外に売りに行ってその都度そういう話をしていると手間がかかり、(花を)作るほうがおろそかになるんじゃないかと心配されたこともありますが、これがやりたくて始めたものですし、毎回買いに来てくれるお客様もいるので、これからも続けていきたいと思っています。



出張販売の様子

買いに来る人と向き合いながら花を売る。

喜多方めんこいくらぶ

「喜多方めんこいくらぶ」は、綿の栽培や加工などを農泊のメニューにしようと町の方や農泊農家が集まって結成されました。私を含め加入している農家の方はみな綿を栽培しています。

あづま旅館の女将の齋藤百合子さんが名付け親で、「綿」に「恋」するから「めんこい」、また会津弁で可愛いことを「めんこい」というので、2つの意味を掛けて「めんこいくらぶ」となりました。皆様には、それとあわせて気持ちが「めんこい」おばさんの集まりだと紹介させてもらっています。

これまで綿を育てたので今度は織り方をやりたいと思い、糸紡ぎを始めているほか、メンバーが育てた農産物等をイベント等で販売しています。また、昨年は、ベリノ・カンパニーさんと協力し、全国グリーン・ツーリズムネットワーク福島県大会にて野良着のファッションショーを開催しました。

行政はタテのつながりはしっかりしていますが、ヨコのつながりは薄いように感じます。現在、喜楽里博やグリーン・ツーリズムがあり、今度はディスティネーション・キャンペーンが始まるので、上手くつながれば良いと思っています。

めんこいくらぶは綿栽培をやりたいという人が集まって結成されたため、地域や団体の枠を越えた構成となっています。これまでグリーン・ツーリズムの分野でそういう団体がなかったため、お互いに情報交換や意見を出し合っ様々なことを共有できるだけでなく、女性のためのグリーン・ツーリズムといった農村と町場が連携した試みを実施されてます。なにより、とても楽しいですし、こうした仲間は必要だなと感じます。せっかく喜多方にはたくさんの団体があるので、もっと町場と繋がっていければ、さらに良いものになるのではないのでしょうか。



全国グリーン・ツーリズムネットワーク福島県大会の分科会の様子

平成25年11月14日に開催された同大会の分科会においてパネリストの一人を務めた。

大切にしていること

何事もまず自分が楽しむことを大切にしています。自分が楽しんでいるからこそ相手も楽しめるのだと思います。

また、続けることに意味があると思っているので、始めたからには途中でやめないようにしようと心がけています。そのため、一旦できなくなっても「やめました。」ではなく「休んでます。」と言うようにしています。実際、以前続けていたマラソンは農業を始めて8年間休んでいましたが、再開し、喜多方や会津若松の大会に出るようになりました。いずれは登山も再開したいです。

マラソンへの挑戦

マラソンは平成元年から始めました。ジョギングからでしたが、最初はほとんど走ることができず、走る姿も良くありませんでした。大会に出れば、練習もして走れるようになるだろうと思い、出場するようになりました。まず5kmを走ることから始めて、続けるうちに10kmに伸び、そのうちハーフ(21.0975km)も走れるようになりました。当時は1カ月に1回以上は大会に出場していましたね。また、体調面で冷え性も改善され、健康診断でも善玉コレステロールが増えるなど良い結果が出るようになりました。

ある時、マラソン仲間からホノルルマラソンを走ってきたという話を聞き、そのマラソンを走るという目標を立てました。そして、平成8年にホノルルマラソンに挑戦し、5時間20分で完走することができました。本当に楽しかったですし、継続することで目標が達成できたという経験は大きな財産になったと感じます。また、自分がこうなりたいというイメージがあるとより頑張れるという部分はあると思います。

マラソンを再開したところなので、これから出場する大会をもう少し増やしていきたいです。



めんこいくらぶの仲間と

今後の展望

私はまだ62歳だと考えているので、80歳までは変わらずに今の仕事を続けていきたいです。続けている間にまた新たにやりたいことや別の考え方が見つかるのではないかなと思っています。何をやるにしても、年齢はさほど関係ないと思います。今でも好きなこと、やりたいことがたくさんあって困るくらいなので。体力が衰えても規模を縮小して花を作りたいという思いもありますし、ひよつとすると、マラソンで各地を走っているかもしれません。